五輪に向けビーチバレー連携

スポーツ研と日本バレーボール協会が協定

専修大学スポーツ研究所は6月4日、2020年東京五輪に向け、ビーチバレーボールの普及と競技水準のアップを目指し、公益財団法人「日本バレーボール協会」と連携協定を結んだ。締結式は生田キャンパスで行われ、専修大学、バレーボール協会、川崎市から関係者12人が出席し行われた。日本バレーボール協会が、大学との連携協定を結ぶのは初めてのこと。

握手をする嶋岡会長（左）と佐竹所長

ビーチバレーボール場のある川崎市港湾振興会館（川崎マリエン、川崎区東扇島）が、2018年にスポーツ庁から技術強化拠点に指定されたことから、スポーツを専門とする研究所がある専修大学に、川崎市、バレーボール協会が協力を呼びかけた。スポーツ研究所には常圧低酸素トレーニング室、運動生理学実験室などが整備されており、運動心理学、運動生理学、体力向上、女性アスリートなどに関する研究を行う教員がそろっている。

こうした環境を生かし、専大ではビーチバレーボールのトレーニング方法、技術分析、ゲーム分析、心理面、暑さ対策などをサポートしていく方針だ。

スポーツ研究所の佐竹弘靖所長は「研究所の取り組みや人的資産を提供していきたい。地域に根ざしたスポーツ文化を定着させ、発展させることにも大きな意義がある」と話す。

日本バレーボール協会の嶋岡健治会長は「専修大学と連携することによって技術を上げ、東京五輪で良い成績が収められるようにしたい」と語った。

法学部6教員が報告

中国・南開大学で国際学術シンポ

法学部と組織間協定方式による国際学術交流協定を締結している南開大学法学院（中国・天津市）で6月22～23日、「北東アジアの未来に向ける法治国際学術シンポジウム」が盛大に開催された。南開大学の創立100周年記念行事の一環。シンポジウムは3回目となり、南開大学での開催は2回目となる。

報告する大西准教授（左から2人目）

シンポジウムには本学、南開大学のほか、日中韓の8大学が参加した。本学の参加教員と演題は▽森川幸一法学部長（コメンテーター）▽榎透教授「民営化・公私協働をめぐる公法的規制と企業の活動範囲の拡大」▽岡田好史教授「不正指令電磁的記録に関する罪をめぐる現状と課題」▽小川浩三教授「相続法の改正について」▽大西楠・テア准教授「2018年入管法改正と就労資格の拡大」▽吉川純恵講師「消極的関与から積極的関与へ：中国の国連平和維持活動の変遷」。

森川学部長は「日中韓の法学者が集まり、それぞれの国内法の現状や課題、相互影響などを話し合う貴重な機会を与えてくれた南開大学に感謝したい」と語った。また、今後の相互交流活動についても協議された。

南開大学は中国の国家重点大学の一つで、同国内トップクラスの教育・研究レベルを誇る。本学法学部とは2013年7月に協定を結んだ。

140th 1880-2020 記念事業

ソウル国際ブックフェアに「表現の自由展」展示図書出展

寄稿　山田健太文学部教授

韓国ソウルで行われた「ソウル国際ブックフェア2019」（6月19～24日、ソウル国際展示場）に本学図書館の書籍資料が出展された。文学部の植村八潮教授らとともにソウルを訪問した山田健太教授に現地の様子を寄稿していただいた。（全文はホームページで）

※ソウルでの本企画は専修大学創立140周年記念行事として行われた。

展示図書を前に山田教授（左）とキム・ミョンホワン国立ソウル大学図書館館長。右は窪田藍・専修大学図書課員

ジャーナリズム学科開設記念企画展「時代にゆれた表現の自由～江戸から平成、そして○○」は、映画上映や、専修大学創立140周年記念行事の冠もついた作家・森絵都さんの特別講演会など、一連の行事とともに終了した。（詳細はニュース専修6月号など参照）

日ごろは特段気にしていないであろう自由に本が読めること、あるいは自由に本が出版できること自体、決して〈当たり前のこと〉ではないことを、少し立ち止まって考えてもらえる機会になったと思う。

こうした表現の自由の問い直しは、反響を呼び、NHK総合テレビなどメディアでも紹介された。直接会場に足を運んでいただいた一般市民の皆さんも数多くいると聞き、大変うれしく思っている。

高まった専大の存在感

この企画展が日本書籍出版協会の目に留まったことから、ソウル国際ブックフェアの特別エキシビション「禁止本」に参加することになった。「禁止本」フェアは、韓国における出版の自由を正面に掲げた企画で、あわせてアジア各国の出版禁止本の展示も行われ、日本、マレーシア、タイ、トルコなどアジア諸国の出版禁止本が展示された。日本を代表して参加した専修大学は『長崎の鐘』（永井隆著）▽『チャタレイ夫人の恋人』上・下（D・H・ロレンス著　伊藤整訳）▽『悪徳の栄え　續』（マルキ・ド・サド著　澁澤龍彦訳）の3点を展示した。会場の展示やすべての配布・掲示物には「Senshu University of Japan」が表記されていた。

こうした行事に協力の機会が与えられたことは、表現の自由の擁護・発展にわずかながらも貢献できたという意味で大変光栄なことである。対外的に専修大学のプレゼンスを高めること、そしてジャーナリズム学科設置年の一つの記念にもなったといえよう。

ラオスの会計を解説

国際交流特別講演会

国際交流協定校のラオス国立大学から初めて講師を迎え、第171回国際交流特別講演会が6月29日、生田キャンパスで開かれた。講師は商学部海外客員教授のサイポン・コンマニラ氏（ラオス国立大学経済経営学部会計学専攻長／准教授）。市民、学生ら多数が訪れ傾聴した。

サイポン客員教授（左）と山﨑教授

経済発展著しいラオスでは、監査事務所が急激に増えている。監査事務所が監査報酬を決定するためにどのような要因があるのかを、ラオス国内45の監査事務所への綿密な調査を基に論じた。進行役と補足解説は山﨑秀彦経営学部教授が務めた。「ラオスの会計」という触れることの少ないテーマだけに、会場から質問が活発に寄せられた。

本学はラオス国立大学と2008年に国際交流協定を締結。今年3月には本学会計学研究所がラオスでの簿記教育の発展と普及に向けて、ラオス国立大学経済経営学部、ラオス商工会議所などと協力協定を結んでいる。サイポン海外客員教授は、簿記普及プロジェクトメンバーとして、ラオス国内での複式簿記の普及にかかわる簿記テキストの研究や開発を行っている。

訃報

長島博氏（ながしま・ひろし）名誉教授・元文学部教授

6月29日、79歳で死去。1962年から2010年まで在職。専門はスポーツ文化論。

外国語のススメ　外国語教育研究室

— 76 —

英語

“Play” English Together

Jeffrey C. Fryckman
フリックマン,ジェフリー C.文学部准教授

I start my English classes with a video clip from a movie in which a young Bosnian man says to his friends, “Let’s speak in English. I need to practice before I go to work.” He works at a hotel in Sarajevo and needs English to speak to foreign customers.

I use the video to demonstrate to students that often the only way to practice a foreign language is to do so with each other, and that it is a good way to improve your language skills. I then explain to students that learning a language is a lot like learning a sport. The teacher is the coach, grammar is the rulebook, and the classroom is the field. And, just as with a sport, students must practice on their own in order to develop their skills.

Some students feel strange speaking English to each other, but I remind them that they practice sports together, and tell them that practicing a language together is the same thing. I tell them that if they really want to become fluent, they have to get out on the field and “play” English with their friends.

※短縮版。全文はCALL教室ホームページで。